



# 日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.11 2012年7月31日発行

## ■ ニュースレター発刊にあたって

一般社団法人 日本整形外科スポーツ医学会  
理事長 高岸 憲二



日本整形外科スポーツ医学会は、第1回を整形外科スポーツ医学研究会として市川宣恭先生が1975年に大阪市で開催されておられます。その後、1987年に日本整形外科スポーツ医学会となり、昨年12月5日に一般社団法人

化へ移行いたしました。昨年岩本幸英会長が開催されました第37回学術集会は1,000名を越す参加者があり、学会員数は現在2,000名を超えております。また、筒井廣明会長が開催される本年の学術集会の演題数は300題を超えたと伺っております。本学会の今日までの発展は、松本秀男、麻生邦一両副理事長をはじめとする、理事・代議員の先生方、そして会員の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。

本学会が、今後どのような方向性で活動していくべきかについては本学会の大きな課題の一つと考え、この度先輩の先生方、中でも今まで本学会の会長を務められました先生方へ本学会にまつわる思い出や要望、本学会のアイデンティティーなどについてご意見をお伺いいたしました。

今回、第15回までの学会長の先生方へご執筆をお願いしましたところ、中嶋寛之先生、秋本毅先生、渡辺好博先生、石井清一先生の4名の先生方から貴重なご意見を頂戴致しました。早速、拝読させて頂きましたが、本学会の前身である整形外科スポーツ医学研究会では、当時の参加者はまだ少ないものの学会開催時のスポーツ整形外科に対する熱気がひしひしと伝わってまいりますし、学術集会開催時に学会として対応すべき諸問題をテーマとして取り上げられていることがわかりました。また、スポーツ整形外科の医療の在り方や心構えなどについても貴重なご意見をいただきました。

昨年「スポーツ基本法」が制定されました。これは、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利である。」との考えを基本理念とし、地域スポーツの推進と競技スポーツの推進を2本柱として施策に盛り込まれています。このようなことも踏まえ、今後本学会は、競技スポーツと健康スポーツを見据えながら活動していくことが重要と考えます。

最後になりましたが、今回ご寄稿頂きました4人の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも会員の皆様の忌憚のないご意見と本学会への一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

## ■ 日本整形外科学スポーツ医学会の発足と今後を考える

第4回学術集会 会長 中嶋 寛之



本学会創設時の経緯については、先般出版された「新版 スポーツ整形外科学」(南江堂)のなかで「日本におけるスポーツ医学の歴史」にふくめ執筆させて頂いた。その後自宅の書類を

整理していたところ新たに昔の資料が出てきたのでこれらも参考にしてこの機会に学会創設期の記録として伝え残しておきたい。

### 1. 「整形外科学スポーツ医学研究会」の創設

わが国のスポーツ医学に関する学会らしい組織としては、1949年に発足した「日本体力医学会」が挙げられる。しかしこの学会は、国民体育大会開催に伴って開催されるため、体力をふくめ基礎的なスポーツ医学の内容が中心で臨床的なスポーツ医学は付随的な感が否めなかった。1964年開催された東京オリンピックは競技力向上につながるトレーニング領域のみならず健康管理に携わる臨床医の参加も必要とされ、筆者らも強化合宿の巡回診療にあたった。当時も学生や実業団の競技選手における膝関節損傷やアキレス腱断裂などのスポーツ損傷の治療は整形外科医にとっても大きな課題であったが、1960年代後半から1970年代にかけてのジョギングブームで代表される一般市民の健康志向のスポーツ参加は新たなスポーツ障害も多発させていた。

そのような背景のもとでスポーツ損傷の対策に関心があった整形外科医が集まり1975年6月1日第1回「整形外科学スポーツ医学研究会」が大阪市身体障害者スポーツセンター講習室で開催され当番世話人には大阪市大整形外科の市川宣恭先生があたられた。なお顧問として池田亀夫(慶応大)・伊藤忠厚(日本医大)・河野左宙(聖隷浜松病院)・小谷勉(大阪市大)・土屋弘吉(横浜市大)・津山直一(東京大)、世話人としては市川宣恭(大阪市大)・高沢晴夫(横浜港湾病院)・鞆田幸徳(日本医大)・中嶋寛之(関東労災病院)・城所靖郎(慶応大)(ABC順)の諸先生があたった。

第1回のテーマは市川先生の専門領域である「腰部のスポーツ障害」となり、15演題、100人弱の参加者が集まった。また研究会の記録は、津山先生のお世話で雑誌「災害医学」(金原書店)に特集として6演題は全文、残りは400字抄録として掲載されることになった。第2回は高沢先生が世話人となり「膝内障」のテーマで行われた。以後毎年1回、6~7月頃に各世話人のもとで場所とテーマを変えて別表のごとく開催されてきた。手元の資料によれば、第3回は再び市川先生で、「肘関節のスポーツ障害」と「中高年のスポーツ障害」、第4回は中嶋が「肩のスポーツ障害・外傷」、第5回は秋本先生が「下腿~足」と「その他のスポーツ障害・外傷」、第6回は鞆田先生で「前腕~手の障害」と「その他のスポーツ障害・外傷」、第7回は高岸先生で「脊椎全般のスポーツ障害」、第8回は城所先生で「骨折(脱臼骨折、疲労骨折を含む)」、第9回は渡辺先生で「捻挫、脱臼、靭帯損傷など関節に関する問題」、第10回は鳥山先生による「発育期におけるスポーツ外傷またはスポーツ障害」となっている。なおこの時から当番世話人の名称が当番幹事に変更され、別表のごとく11回今井、12回青木、13回井形の諸先生が当番幹事を務められている。

初期の本研究会の中で最も印象に残っているのが浜松で行われた第5回秋本毅会長のもとでの開催である。会場はえんてつ(遠州鉄道)会館であり、昼食時に食事が会場で出され、ビールが付いていた。そこまではさして驚かなかったが、バンドが入りステージにあれよあれよという間にスモークが流れてきた。やがて歌手が入れ替わり立ち替わりあられ歌の競演がはじまった。後で秋本先生の弁でわかったが、会場の建物が本学会を最後として取り壊されるとのことで会館の専属スタッフが是非この機会に最後のステージを務めたいと希望されたとのことである。幹事にも知らされていなかったハプニングだったようであり秋本先生は恐縮されていたが、我々は十分楽しませていただいた何とも懐かしい思い出である。学会の草創期の語り草として居合わせた他の先生がたにも記憶されている方は多いのではないと思われる。

## 2. 「日本整形外科学会」への発展と今後

第13回整形外科学会スポーツ医学研究会（1987年）は井形会長のもとで開催されたが、前日（昭和62年7月9日）に徳島のホテル東急インで顧問・幹事会が行われた。この席では本学会の名称変更について検討され、その結果「日本整形外科学会」(JOSSM)と発展的な名称に変えることが決定した。筆者は会議に参加していた者の一人として、別の名称すなわち「日本スポーツ整形外科学会」を提案した。これはようやくスポーツ整形外科という専門領域がスポーツ医学のなかで存在感を示しつつあったこと、また幅広くスポーツや身体活動を医学的に検討していくうえで整形外科の中の1領域という捉え方では狭すぎ、医学会さらに一般社会に対して浸透性がないように思われたからである。しかし25年も前のことであり、孤軍奮闘むなしく大方の賛同は得られなかった。出席者に整形外科の教授が多かったので当然の結果かもしれないが、スポーツ医学に期待する立場の違いでもあったかと思う。

現在、本学会とJOSKASとの住み分けが課題になっていると側聞する。スポーツ整形外科の診療科が各所に多数開設されている今日なら、筆者の提案は受け入れられたかもしれないが、その後その理念は日本臨床スポーツ医学会の発足（1989年）という別の形で生かされた。

少子高齢社会の今日、スポーツ整形外科の医療のあり方には「競技スポーツ整形外科」と「健康スポーツ整形外科」との2面が存在すると考える。長期的なスパンでは競技スポーツも生涯スポーツの一部分として健康スポーツの中に含まれるべきものであろうが、医療の臨床の場では異なった売り場としてユーザーに提供できるのではないかと思う。とくに日本整形外科学会は2007年ロコモティブシンドロームという概念を提唱した。これは

表1

開催回	開催日	会長氏名
1	1975年6月1日	市川 宣恭
2	1976年6月6日	高澤 晴夫
3	1977年6月4日	市川 宣恭
4	1978年4月16日	中嶋 寛之
5	1979年6月2日	秋本 毅
6	1980年6月7日	鞆田 幸徳
7	1981年6月13日	高岸 直人
8	1982年6月5日	城所 靖郎
9	1983年6月25日	渡辺 好博
10	1984年7月14日	鳥山 貞宣
11	1985年7月13日	今井 望
12	1986年7月3日～4日	青木 虎吉
13	1987年7月10日～11日	井形 高明
14	1988年7月15日～16日	高槻 先歩
15	1989年7月7日～8日	石井 清一

まさに健康スポーツ整形外科の主要なテーマであり、そのような意味でも本学会の将来を考える上で日本スポーツ整形外科学会という名称に賛同される方も多いのではなかろうか。

今回ニュースレターへの執筆依頼に際し、本学会の前身である「整形外科学会スポーツ医学研究会」の発足時の状況についてふりかえるとともに、学会への移行時の経緯さらに今後の可能性などについて述べてみた。この文がスポーツ医学を志す後進の先生方に寄与できれば幸いである。

## ■ 日本における整形外科スポーツ医学の歩み

### 第5回学術集会 会長 秋本 毅

1987年（昭和62年）新潟市での第60回日本整形外科学会総会開催時に「日本整形外科学会60年の歩み」という冊子が作られ配布された。「スポーツ医学」の項は私が担当したが、本稿はその要旨に加筆したものである。

#### 1. 本邦の整形外科スポーツ医学の始まり

整形外科スポーツ医学の歴史を日整会誌からみると、1930年（昭和5年）の第5巻に齋藤一男日医大教授による「跳躍選手ニ見タル拇趾内側種子骨ノ分裂（Fragmentation）」がある。さらに同教授は1935年の第9巻に「スポーツ整形外科」と題する論文を発表した。これが本邦の整形外科スポーツ医学の始まりといえるものである。一部を紹介すると『私ハ今度整形外科学会カラ「スポーツ整形外科」トイフ非常ニ大キナ而モ漫然タル「テーマ」ヲ宿題トシテ課セラレタ・（中略）・幸ニ恩師高木教授ヨリ大正15年ニ與エラレタ「スポーツ」ト云ウ「テーマ」ニヨリ研究調査中ノモノガアツクノデ今日迄得ラレタ結果ヲ発表シテ・（中略）・向後益々コノ方面ノ研究ヲ積ミ再ビ発表スル機会アランコトヲ望ムモノデアル』とある。前編に骨、関節あるいは骨端部に対するスポーツの影響（スポーツ効果）、後編にスポーツ外傷を部位別、種目別に解説している。この他戦前のスポーツ関連論文は25編あるが当時の論文は旧漢字とカタカナによって書かれている。英文献を読むに匹敵する難解さを感じるところもあるが、整形外科スポーツ医学を志す方々には一読していただきたいものの一つと思っている。

#### 2. スポーツ医学研究会の発足

戦後のスポーツ外傷、障害の研究は昭和30年代になって本格化し、昭和33年発刊の災害医学に多くの論文が発表されている。水町二郎横浜市大教授の「スポーツ骨折」や村地俊二名大助教授らによる「過労性骨障害」、「肉離れ」に関する論文等戦後の整形外科スポーツ医学に先駆的な仕事をした人々の活躍がある。この

昭和30年代から40年代のスポーツ医学関連学会には日本体力医学会があった。本学会ではスポーツ科学的な演題が多く、整形外科スポーツ医学はその一部を占めるに過ぎなかった。そこで市川宣恭（大阪市大）、城所靖郎（慶大）、高澤晴夫（横浜港湾）、鞆田幸徳（日本医大）、中嶋寛之（関東労災）ら5氏が発起人となり昭和50年に整形外科スポーツ医学研究会を発足させた。当時私は聖隷浜松病院で「発育期のスポーツと脊椎分離発生との関連」を調査研究していたことから、発足時に顧問の一人であった部長の河野左宙新大名誉教授に同行し、第2回からの世話人に名を連ねることになった。日本整形外科学会スポーツ医学会の基礎を築いた錚々たる5名の発起人に比し32歳の若造であった私の受けたプレッシャーは大変なものだった。第1回は大阪市スポーツセンターの小教室のようなところで開催されたが、現在の大きな学会にまで発展するとは当時思いもよらなかった。

#### 3. 日本整形外科学会スポーツ医の誕生

スポーツ医の称号は昭和57年に発足した日本体育協会スポーツドクター制度に始まる。一方、日本整形外科学会は昭和59年にスポーツ委員会を設けてスポーツ医学の方向づけ等を検討し、昭和61年スポーツ外傷や障害の治療・予防に貢献するため日整会認定医（現専門医）を対象にスポーツ登録医（現日整会認定スポーツ医）制度を発足させた。現在日整会認定スポーツ医は3400名余であるのに対し日本体育協会公認スポーツドクターは7000名余、平成3年発足の日本医師会認定健康スポーツ医は18000名余とされる。整形外科がその名称のためか運動器疾患を専門的に診る科であることの認識が未だ不十分な中で「日整会認定スポーツ医」の役割が一般の方々に十分に理解されているとはいえないのが現状ではないだろうか。

## ■ スポーツ医学雑感

## 第9回学術集会 会長 渡辺好博



子供の頃から私はスポーツが大好きだった。小学校の頃（昭和12年—昭和18年）蹴球（サッカー）、相撲、ドッジボールが学校では盛んであった。その頃、スポーツ中に水を飲むのは禁止されて

いた。水を飲むと肺に水がたまって肺結核になるから注意せよとのことであった。その頃肺結核は若者に多く、若者には死に至る病で、多くの若い選手が命を落としていた。昭和11年（1936年）ベルリンオリンピックのマラソンの記録映画を見ても2時間以上も水を1滴も飲まずに選手は走り続けている。それが今ではマラソン競技では水のみ場まで用意されており、スポーツ競技中に水を飲む必要ありと、当時とは大きく様変わりしている。太平洋戦争中はまだスポーツ医学とは無縁の時代で、今から言えば非常識がまかり通っていて、なんでもかんでも精神主義一辺倒で、怪我は練習で治せなどという無茶な監督が居た。五輪で金メダルを取ったバレーボールの監督もそうであった。

整形外科スポーツ医学会が結成されたのは、1975年の頃であった。その頃は幾つものスポーツに関連する研究会や学会が開かれ、日本におけるスポーツ医学の黎明期の感がした。丁度私が新潟大学から山形大学に移ったこともあって、それまでは「手の外科」だけの仕事であったが、新潟では出来なかったスポーツ医学にも大いに関心を持ち仕事をのばした。私はスポーツ関連学会のいくつかに関係して、いろいろな問題を提起した。私が日本整形外科スポーツ医学会を担当したのは第9回で1983年6月参加人数250名、スポーツ行事として当日早朝ジョギング大会を行い15名の会員の参加を見た。

当時、山形市にある蔵王スキー場は、山形大学医学部キャンパスから至近距離にあり、蔵王スポーツ医学セミナーを開催する計画を立て、全国のスポーツ医学に興味のある整形外科医に参加を呼びかけ、数題のスポー

ツ医学関連演題を用意して、開催した。以来毎年恒例となり、今年も50名の参加を見ている。雪の蔵王は依然として好評である。

私が中学生の頃、柔道では、授業の開始として「うさぎ跳び」を長距離させられて膝が大いにつらかった。一方シュラッテル病の原因がいまだはっきりしていなかったので、この両者に関係がありはせぬかと調査をしたら、やはり関係が明らかとなり、喜ばしいことに、間もなく「うさぎ跳び」が学校体育で禁止処置がとられるようになった。

今になって考えると、スポーツ界では幾つかの可笑しい事が横行していた。野球選手が肩を冷やすのはよくないというので、プロの選手が冬季に水泳をする事が禁じ



図1 ある学会で作製した投球障害（投げ過ぎ）防止のパンフレットの一部。全国の中学、高校へ配布。（二階堂正宏氏・画）

られていた。今では投手は、投げ終わるとクーリングと称して肩を冷やしている。

私は現在スポーツ競技を見物するのが殆どで、いろいろ感ずる事が多い。その一つにヘルメットの事がある。かつて、プロ野球の打者は、ヘルメットをしなかった。しかしある年に、阪神の田淵選手が広島の外古場投手のデッドボールを食らって昏倒退場して以来、打者はヘルメットをかぶるようになった。また滑り込む際に走者は手にかすり傷などを受ける危険が多いと思って冷や冷やしていたが今では手袋をしている選手が多くなった。

現在アメリカのプロ野球で活躍している日本人超有名選手は後樂園球場が人工芝を天然芝にすることを渋ったので、膝を痛めずに長期間活躍できるアメリカを選んだという。膝以外にも野球選手にとって大切な肩や肘を大事にする為にアメリカ大リーグで活躍する投手は、毎日投げる球数を厳しくチェックされている。これもスポーツ選手の投げすぎによるスポーツ障害（特に若者）（図1）を以前から警告してきたスポーツ医学のスポーツ界に及ぼした功績の一つであると考えられ、嬉しい事の一つといえよう。

## ■ スポーツ整形外科のアイデンティティーの確立を求めて

第15回学術集会 会長 石井清一



わが国におけるスポーツ医学が組織化されたのは、昭和35（1960）年に東京オリンピックの招致が決定し、選手強化本部にスポーツ医学研究委員会が設置されたことによつてであります。

昭和39（1964）年の東京オリンピックを契機に、スポーツに関心を持つ医師の活動が活発になり、スポーツ医学は徐々にその形態を整えてきました。

一方、昭和43（1968）年には米国のN. H. Cooper博士はエアロビック運動による健康・体力づくりを提唱し、生活習慣病の予防と治療にも有効であることを明らかにしました。スポーツ医学は、「一流のスポーツ選手の医学から一般大衆のスポーツ医学」、「治療の医学から予防の医学」へと、その巾と奥行きを広げながら発展してきました。

このような背景のもとに、いち早く設立されたのが日本整形外科スポーツ医学会（昭和50年～1975～設立）であります。昭和61（1986）年には、日本整形外科学会にスポーツ登録医制度が発足しましたが、私が札幌市において、第15回日本整形外科スポーツ医学会を主催したのは、平成元（1989）年のことあります。

その頃、整形外科医の間で繰り返し議論されたことがあります。「整形外科は本来、色々な原因で発生した四肢運動器障害の治療を目的とした臨床科である」、「その原因がスポーツであるということで、スポーツ整形外科を特別に扱う理由が分からない」という疑問であります。

我々がスポーツ整形外科医を目指す場合、我々はまず、スポーツ医学とは何かをよく認識すべきであります。その基盤の上に、最良の整形外科の治療法が選択された時に、スポーツ整形外科のアイデンティティーが確立されることとなります。

スポーツ医学が本来持ち合わせている特徴とは、第1に学際的領域から成り立つ総合医学であるということです。そこでは、整形外科を含めた臨床医学の外に、運動生理学、解剖学、生化学、病理学、栄養学などの基礎医学、あるいは理学療法学、心理学、社会学などが有機的に組み立てられております。

第2にスポーツ医学はフィールドワークが主役の実践医学であります。スポーツの現場においては、トレーナーの資格を持っているあん摩マッサージ・針灸・柔道整復師などの医療従事者、理学療法士、看護師、栄養士、その他の多くのパラメディカルスタッフとのネットワークが作り上げられております。

我々整形外科医がスポーツ医学を実施する場合に必要なことは、まずは総合医学としてのスポーツ医学の構造と機能を正しく認識しなくてはなりません。更にスポーツの現場に積極的に踏み込んでいく必要があります。そのためには、スポーツ医はジェネラルな知識と視野、豊かな人間性、それにオピニオンリーダーとしての気構えを持つことが大切であります。このような土台の上に立って、整形外科が持ち合わせている最新の知識と技術の中から、最も理にかなった治療法を選択できる整形外科医でなくてはなりません。

このような要求が満たされた時にはじめて、スポーツ整形外科が独立した臨床科としての立場を獲得できると思っております。

## ■ お知らせ

### 1. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM: 年 12 冊発行) を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	\$183.-	\$102.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	\$ 30.-

AJSM 購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972 年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。特別優待価格での購読を希望される会員のかたは、事務局あてメールにて購読希望である旨をご連絡ください。追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自購入手続を進めてください。

### 2. 会員登録情報の変更について

勤務先、自宅に変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。ご連絡がない場合、学会誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。第 32 巻 4 号抄録号は、2012 年 8 月 3 日(金)までにご連絡いただいた先にお送りする予定です。

### 3. 2012 年度会費のご案内について

7 月下旬に 2012 年度会費についてご案内いたしますので、お手続きくださるようお願いいたします。また、自動引落を選択されています会員の方におかれましては、9 月下旬に引き落としを予定しておりますので、よろしく願いたします。

### 4. 第12回大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー開催のお知らせ

日 時: 2012 年 8 月 25 日(土) 13:00 ~ 18:00

会 場: アップルバレス青森 (〒030-0802 青森市本町五丁目 1-5 TEL: 017-723-5600)

入 場 料: 無料 (定員 300 名となり次第、受付を終了いたします)

参加資格: 高校生・大学生ほか、一般の方もご参加可能です。

詳細は HP をご覧ください。(URL <http://jossm.or.jp/>)

#### 編集後記

今年オリンピック・イヤーで、7 月 27 日からイギリスのロンドンで第 30 回の記念すべき大会が開催されます。日本からの参加選手も続々と決定してきており、盛り上がりを見せている昨今ですが、会員の先生方の中には、選手個人や競技団体サポートをされ、忙しい日々をお過ごしの方も多いかと思います。日本選手団は、8 年前のアテネオリンピックでは 16 個、4 年前の北京オリンピックでは 9 個の金メダルを獲得しました。メダルの数が全てではないと思いますが、気になるころであります。選手の皆様方には、最終調整をしっかりと行い、良い結果が得られることを祈念しております。

今回のニュースレターは、第 1 回から第 15 回の学術集會会長の中から 4 名の先生方に、学会にまつわる思い出やご意見・ご要望などを執筆いただきました。日本におけるスポーツ医の誕生から学術集會開催のご苦労話など、われわれ会員にとって、日本整形外科学会スポーツ医学会の歴史を今一度、見直す機会が得られるものと考えます。また今後のスポーツ医のあり方や役割に関して、各々の先生方からたいへん貴重なご意見をいただき、会員とくに若い世代の先生方のご参考となられましたら幸甚です。

(山崎 哲也)

日本整形外科学会 スポーツ医学会 ニュースレター No.11 2012 年 7 月 31 日発行

編 集: 日本整形外科学会スポーツ医学会広報委員会

酒井 宏哉(担当理事)、亀山 泰(委員長)、川上 照彦(アドバイザー)

大槻 伸吾、金岡 恒治、杉本 勝正、戸祭 正喜、山崎 哲也

発 行: 一般社団法人日本整形外科学会スポーツ医学会

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内

TEL 03-3263-5896 / FAX 03-5216-3115

E-mail [info@jossm.or.jp](mailto:info@jossm.or.jp) URL <http://jossm.or.jp/>